

『#草莽の臣』（著）を読んでみた。著者は、2019年、『火神子 天孫に抗いし者』で第10回朝日時代小説大賞を史上最年少で受賞し、デビュー。同年、同作で第2回細谷正充賞を受賞。

草莽とは、草深いところや民間、あるいは官職に就かず民間にとどまっている人を意味するそう。特に、幕末・明治維新期には、地位を求めず国のために立ち上がる人々のことを指した。「草莽崛起」という言葉で使われる。この言葉は、幕末の思想家である吉田松陰が、衰退する幕府や藩に頼るのではなく、身分に関係なく志を持った民間の人々こそが日本の変革を担うべきだと説いたことに由来する。松陰の教えを受け継いだ弟子の高杉晋作は、この「草莽崛起」の考えに基づき、武士だけでなく農民や町人も加えた部隊である奇兵隊を結成したという。

どこまで史実に基づいているかわからないが、増田一族が山陰にて、千年にわたり国（日本）を護り抜いたという話である。その千年の話を4部に分けて語っている。日本は四度滅びていたかもしれない歴史の分岐点で、益田一族の活躍によって、日本国内で二派に別れて覇権を取ろうと私欲で行動する者たちを一つにまとめ上げ（または一方を滅亡に向かわせ）、外敵からの日本への侵略を食い止めたというものである。

はじめは白村江の戦い、次いで元寇、秀吉の朝鮮出兵、そして幕末の西洋からの開国という4つの重大事である（秀吉の朝鮮出兵は少しニアンスが異なるように思えるが・・・）。どうも外敵から日本を護るといことが増田家の家訓のようなのだ。本書には歴史の裏側で尽力した益田家の政治、諜報への我々がこれまで知らなかった物語でそこにある。

これまでになかった視点で書かれており、読んでいて新鮮であった。

では近代ではどうなのか。誰が外敵から日本を守ってくれるのか。敗戦後に関しては、5年間米国の植民地とされていた。そのころ日本の主権が守られなかったことの一つとして下山事件が挙げられるのではないかな。ロッキード事件も米国の主導でなされた可能性もある。近々、この辺についても考察してみたい。

評価：★★★★☆